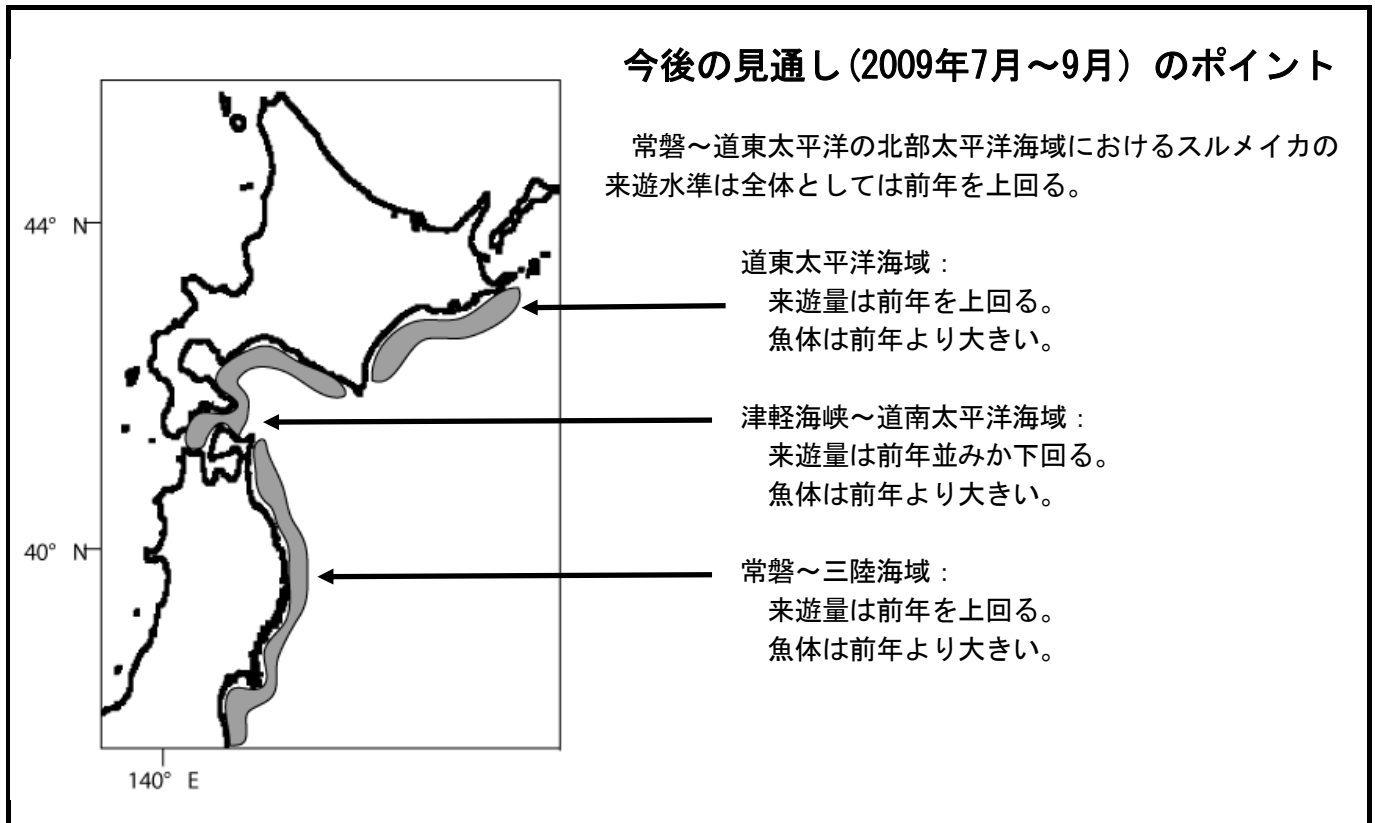


平成21年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：今井、和田、染川

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 業務推進部

電話：0154-91-9136、ファックス：0154-91-9355

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp/>

平成 21 年度第 1 回太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2009年7月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域。

対象漁業：いか釣り、底曳網、定置網、まき網。

対象魚群：冬季発生系群（2009年級群）。

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底曳網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年よりも大きい。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並みか下回る。
- (2) 漁期・漁場：期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年よりも大きい。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底曳網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：道東太平洋海域の漁場形成は前年より早い。
- (3) 魚体：前年よりも大きい。

漁況の経過（2009年5月～6月）および今後の見通しについての説明

（1）資源状態

太平洋海域で漁獲されるスルメイカは、冬季発生系群が主体であり、これに秋季発生系群の一部が含まれると考えられている。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から推測すると、1970年～1980年代は低位水準で推移した。1989年から増加に転じ、1989年以降では1996年（年間漁獲量：276千トン）が最も資源水準の高い年となった。近年は高位から中位水準で推移しており、直近2年の漁獲量は2007年に大きく増加したが2008年は減少した。なお、2008年7月～9月の常磐以北太平洋海域の漁獲量（生鮮）は36千トンであり、2007年同期（53千トン）を下回った（図1、図2）。

（2）関連調査結果

A：第1次漁場一斉調査

6月上旬～下旬に実施された第1次漁場一斉調査（釣り）の結果（図3）、三陸近海域（41°N以南、143°E以西）の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当り漁獲尾数）は0.28尾であり、2008年（0.33尾）並みであった。津軽海峡周辺海域（41°N以北、143°E以西）は6.06尾であり、2008年（12.45尾）を下回った。沖合域（143°E以东）では0.85尾であり、2008年（0.01尾）を上回った。全水域では1.09尾となり2008年（1.52尾）を下回り、2004年以降の平均的な水準（1.03尾）であった。CPUEが10尾を越える地点は津軽海峡周辺海域および沖合域で認められ、この海域に高密度で分布していたと推測される。

B：その他関連調査

・新規加入量調査結果：5月上旬～下旬に常磐～三陸沖合域で実施された表中層トロールネットを用いた漁獲試験の結果（図4）、外套背長5cm以上8cm未満のスルメイカの平均採集尾数（1曳網当たり漁獲尾数）は106.0尾であり、2008年（12.8尾）を上回った。さらに、予報期間に漁場への加入が見込まれる外套背長8cm以上の大型個体の平均採集尾数も41.3尾であり、2008年（2.0尾）を上回った。143°～160°E付近まで広く採集されたが、5cm以上の個体は150°E以东に多く分布しており、2008年よりも沖合側に分布している傾向が見られた。

・日本海における一斉調査結果：日本海で6月下旬～7月上旬に実施された一斉調査において、津軽海峡西口周辺海域（39°～42°N、138°～140°E）における平均CPUEは11.5尾であり、2008年（30.1尾）を下回った。

・岩手県沿岸域における漁獲試験結果：6月上旬～7月上旬に岩手県沿岸域で実施された釣り調査（岩手県）によると、2009年の平均CPUEは4.9尾であり、2008年（2.2尾）を上回った。

（3）2009年の各海域の漁況経過（5月～6月）

・2009年5月～6月の太平洋沿岸の主要港の水揚げ量（生鮮：各道県の速報値等の集計による）は7.5千トンで、前年（2008年5月～6月、2.9千トン）を上回った。特に常磐～三陸海域の主要港の水揚げ量は7.1千トンで、前年の1.0千トンを上回った。各地域の詳細な漁況経過は、表1に示す。

(4) 魚体の大きさ

・5月の新規加入量調査（表中層トロール）で漁獲されたスルメイカの全調査地点での外套背長組成は、モードが2cm（2008年：2cm）にある単峰型の組成であったが、外套背長8cm以上の大型個体の比率は高くなっていた。

・6月の漁場一斉調査（釣り）で漁獲されたスルメイカの全調査地点の外套背長組成は、モードが18cmにある単峰型の組成であり、2008年（14cm）より4cm大型であった。海域別では、三陸近海域がモード15cm（2008年：11cm）、津軽海峡周辺海域がモード18cm（2008年：14cm）、沖合域がモード18cm（2008年：11cmと14cm）であった（図5）。

・6月に宮城県～青森県で漁獲されたスルメイカは、前年よりも大型個体の比率が高かった（表1）。

(5) 今後の見通しの説明

・7月上旬現在の本予報対象海域である北部太平洋海域における漁獲対象資源は、本年6月までの各地の漁獲状況から判断すると、概ね2008年を上回る水準であると推測される。5月に実施した新規加入量調査において、今後加入が期待される8cm以上のスルメイカの採集尾数は高い水準であった。6月の漁場一斉調査の平均CPUEは沿岸域では前年を下回るものの、沖合域では前年を上回った。以上のことから本予報期間である7月～9月の来遊水準は前年を上回ると予想される。

・常磐～三陸沿岸域での漁獲対象資源は太平洋沿岸域を北上する群を主体に、津軽海峡から加入する日本海由来の群れが加わると考えられている。三陸近海域の調査船CPUEは2008年並みであり、岩手県沿岸域の釣り調査CPUEと漁業情報は2008年を上回ることから、太平洋沿岸域を北上する群れは概ね2008年を上回ると判断される。一方、津軽海峡から加入するスルメイカの子来遊水準は2008年並みか下回ると推測される。以上のことから常磐～三陸沿岸域の子来遊水準は前年を上回ると推察される。魚体は、一斉調査及び漁獲物の測定結果から、前年（8月～9月、21cm）よりも大型の個体が主体になると考えられる。

・津軽海峡～道南太平洋海域での漁獲対象資源は、津軽海峡から加入する日本海由来の群と太平洋を北上する群である。津軽海峡西口周辺海域の調査船CPUEは2008年を下回り、津軽海峡内の小型いか釣り漁業CPUEは前年並みであったことから、津軽海峡内の来遊水準は前年並みか下回ると推察される。津軽海峡東口周辺海域の調査船CPUEは2008年を下回り、小型いか釣り漁業CPUEは前年並みであったことから、津軽海峡東口～道南太平洋海域の子来遊水準も前年並みか下回ると推測される。以上のことから津軽海峡～道南太平洋海域の子来遊水準は前年並みか下回ると予測される。魚体は、一斉調査及び漁獲物の測定結果から、前年（8月、18cm、9月、21cm）よりも大型の個体が主体になると考えられる。

・道東太平洋～根室海峡周辺海域に子来遊するスルメイカは、太平洋沖合を北上する群と考えられている。漁場一斉調査の結果から、道東太平洋海域に分布するスルメイカの子来遊水準は2008年を上回ると推定される。また、水産総合研究センターの海況予報モデル（FRA-JCOPE）の予測結果によると、本年は道東沖合域の北上暖水の張

り出しは前年よりも強まると予想されるため、道東沿岸域への北上回遊は前年よりも早くなると推測される。以上のことから、7月～9月における来遊水準は前年を上回ると予測される。魚体は、漁場一斉調査の結果から、前年（9月、21cm）より大型の個体が主体と推測される。なお、根室海峡～オホーツク海への来遊は例年通り10月以降になると推測される。

表1. 漁況経過（2009年5～6月）

	漁況経過
高知	5月～6月の主要3港における釣り漁獲量（6トン）は、2008年（15トン）を下回った。CPUEは前年比127%であった。
和歌山	5月～6月の主要2港における釣り漁獲量（13トン）は、2008年（21トン）を下回った。CPUEは前年比86%であった。
三重	5月～6月の主要港における中型まき網漁獲量（93トン）は、2008年（465トン）を下回った。釣り漁獲量は7トン（前年比61%）に減少し、CPUEも前年比74%であった。
静岡	5月～6月の主要港における釣り漁獲量（30トン）は、2008年（8トン）を上回り、CPUEも前年比122%に増加した。
神奈川	5月～6月の主要2港における定置網漁獲量は1.6トン（前年比89%）、釣り漁獲量は0.8トン（前年比63%）であった。
千葉	5月～6月の主要3港における定置網漁獲量（12トン）は、2008年（8トン）を上回った。なお、6月末現在、千葉県沿岸での釣りによるまとまった漁獲はみられていない。
茨城	5月～6月の主要港における沖合底曳網漁獲量は6.3トン（前年比17%）、小型底曳網漁獲量は10.9トン（前年比103%）であった。CPUEはそれぞれ前年比17%、12%に減少した。
福島	6月の全漁港における沖合底曳網漁獲量は93トン（前年比182%）、小型底曳網漁獲量は8トン（前年比266%）であった。CPUEもそれぞれ前年比125%、217%に増加した。釣りによる漁獲は無かった。
宮城	6月の主要10港における底曳網漁獲量は2,863トン（前年比5,634%）、定置網漁獲量は465トン（前年比428%）であった。釣り漁獲量（147トン）は、2008年（21トン）を上回ったものの、CPUEは前年比93%であった。底曳網で漁獲されたスルメイカのモードは18cmと21cmで、前年（15cm）より大型であった。
岩手	6月の主要7港における底曳網漁獲量は56トン（前年比618%）、定置網漁獲量は1,163トン（前年比217%）であった。釣り漁獲量（79トン）は、2008年（0.05トン）を上回り、CPUEも前年比842%に増加した。釣りは例年より早い漁期入りであった。定置網で漁獲されたスルメイカのモードは16cmと22cmの2峰型であり、前年（14cm）よりも大型の比率が高かった。

表1. 続き

青森	6月の八戸港、白糠港における釣り漁獲量はそれぞれ51トン（前年比3,355%）、125トン（前年比177%）であった。CPUEは八戸港では前年比114%であったが、白糠港では60%であった。大畑港の釣り漁獲量は0.6トン（前年比57%）であり、CPUEは前年比86%であった。津軽海峡周辺では、30尾入れ～バラが主体であったが、15～20尾入れも漁獲された。太平洋沿岸では、主体は30～40尾入れで、15～20尾入れも漁獲された。全体としては、前年よりも大型であった。
道南	6月における函館港の釣り漁獲量（133トン）は、2008（123トン）を上回ったが、CPUEは前年比86%であった。
道東	道東太平洋近海での釣りの初漁は7月9日時点では、まだみられていない（2008年は十勝港が7月17日、釧路港が8月11日）。

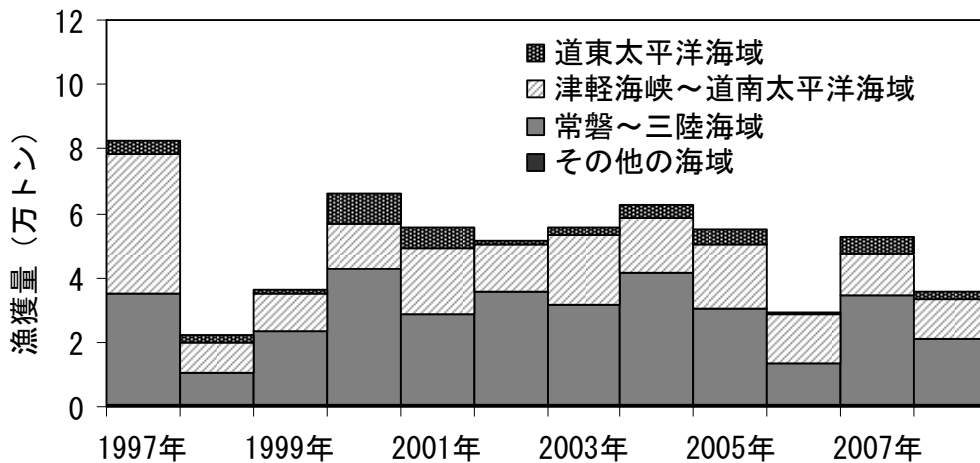


図1. 7月～9月の太平洋沿岸でのスルメイカの漁獲量（生鮮）
（釣り・定置網・底曳網・まき網）

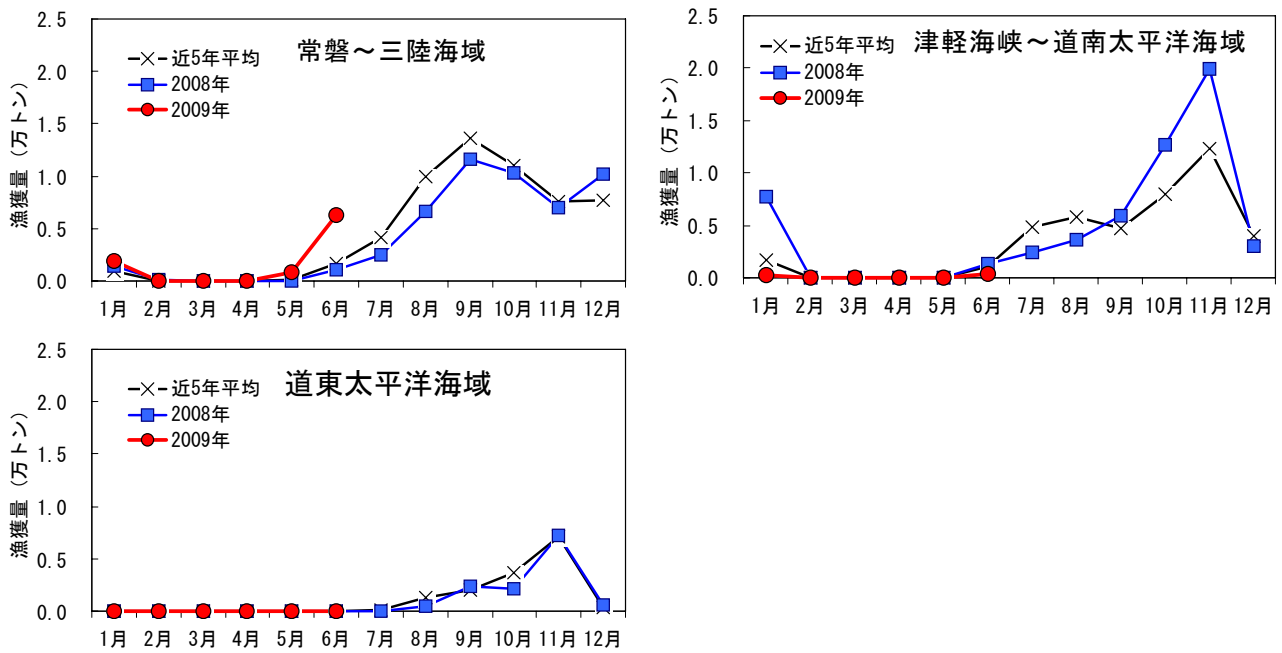


図2. スルメイカ月別海域別漁獲量（生鮮）
 近5年平均は2004年～2008年の平均
 （釣り・定置網・底曳網・まき網）

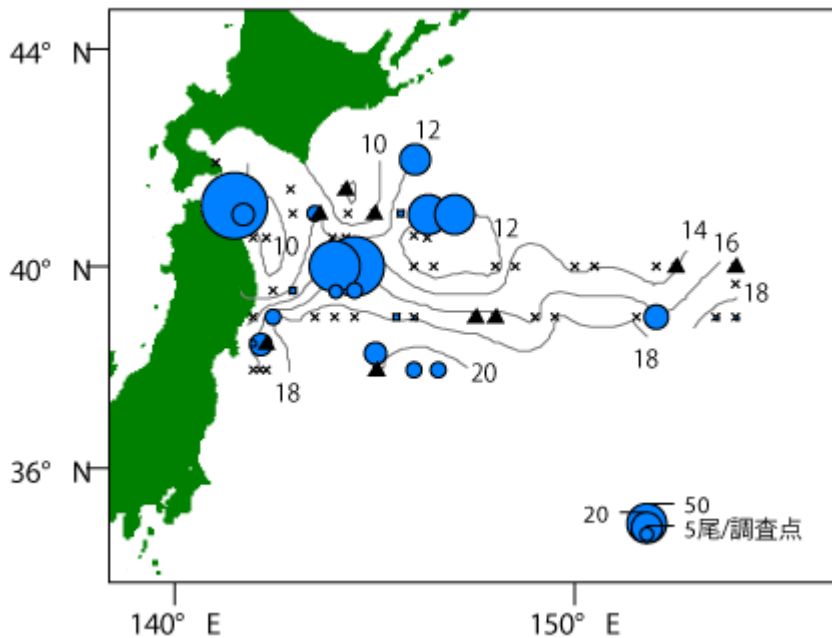


図3. 太平洋いか類漁場一斉調査の結果（6月）
 ○の面積は各調査点の採集尾数（対数値）を示す。▲は採集尾数が1尾、
 ×は採集が無かった点、実線は等温線（海面水温）である。

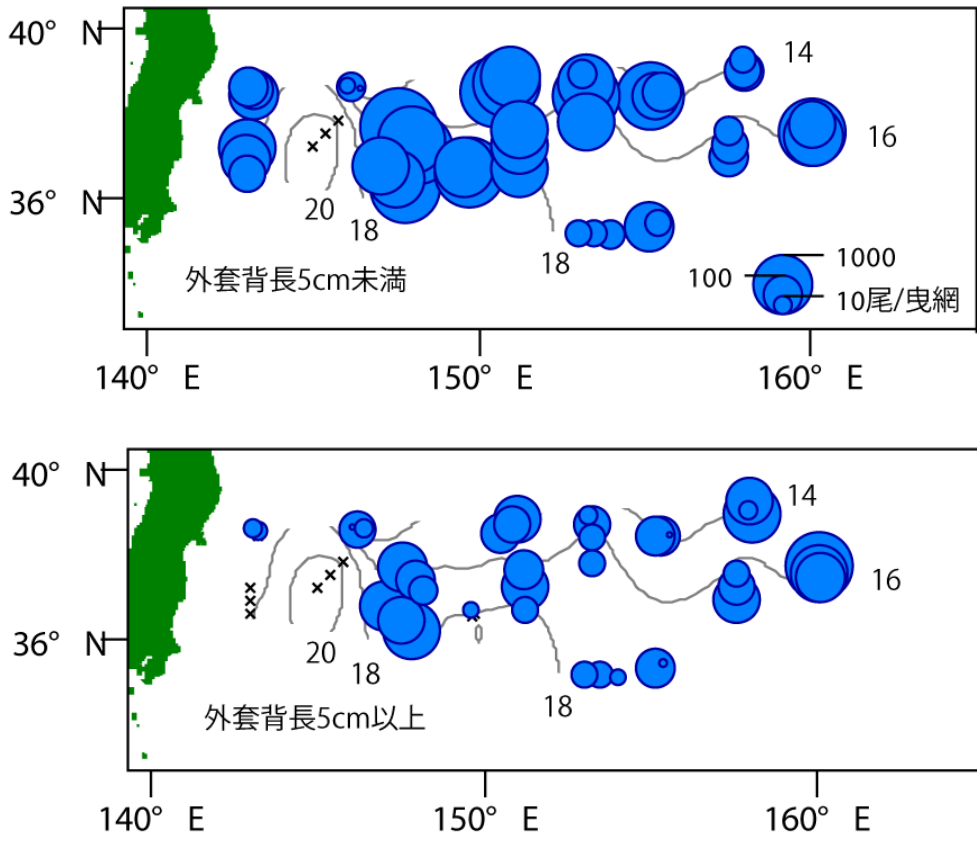


図4. 新規加入量調査の結果 (5月)

○ の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE (1曳網あたりの採集尾数 : 対数値) を示す。×は採集が無かった点、実線は等温線 (海面水温) である。

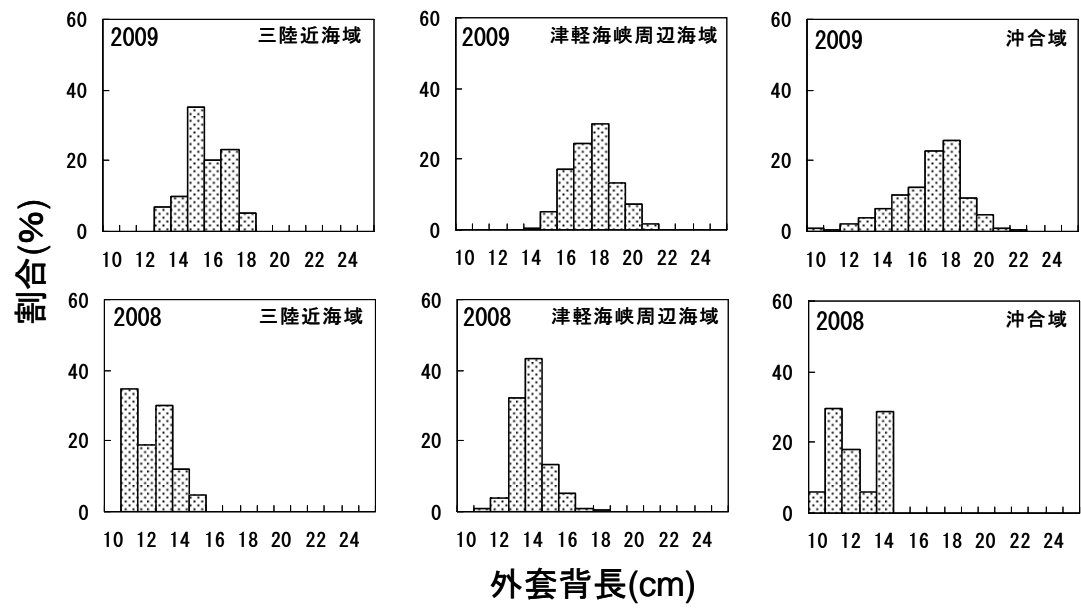


図5. 漁場一斉調査による外套背長組成

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	三重県水産研究所
北海道立函館水産試験場	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	高知県水産試験場
岩手県水産技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
宮城県水産技術総合センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
福島県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所
茨城県水産試験場	東北区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	日本海区水産研究所
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	